世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

演じて紡ぐ、そしてつながる物語

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-07-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 漆川, 由希子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/605

演じて紡ぐ、そしてつながる物語

漆川　由希子

演じることは、その人物がもつ物語を紡ぐことであるだろう。

私は、「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」の主人公・法子を演じた。演技など未経験な全くの素人だったが、友人や監督など多くの人たちの力を借りて、全力で取り組んだ。

「演技をする」ということは、ただ動きをつける、ただセリフを喋る、というだけではない。脚本を読み、法子がどのような物語を歩んでいるのか、どのような気持ちで話しているのか、法子という人物をまるごと理解しなければならなかった。小さなしぐさ、何気ない言葉からも、法子という人物の内側を見つめるのである。

小説を読む際、登場人物の気持ちを考えるといった作業があるが、役を演じるということはその作業の最たるものであると感じた。その人物になりきって演技をしようとすると、読んだだけで汲み取るのは難しい感情の起伏や表情、動きが自然と考えられるのである。例えば、怒りの表情や苦しい表情、喜びの表情など、読んだ際に思い浮かべ想像はできるが、その表情をつくるとなると、こんなものではない！と感じられるのである。想像では笑っている顔を思い描いても、実際には複雑な感情が混ざり合った表情のはずであると考え直し、その複雑さはどこから生まれているのか、何故そう感じているのかをも自然と考えることになるのである。

しかし、法子を理解することは、簡単なことではなかった。そもそも、理解して演じるという前に、自分の気持ちもわからなかったのである。法子の経験を自分がしたらどう感じるか、自分はどんな人間であるのか。そこから考え、自分を理解してからでなければ、法子に寄り添うことはできなかった。

私は、自分の過去を、性格を、振り返らなければならなかった。普段は気にしない行動の、一つ一つに伴う気持ちを考えなければならなかった。それは明るい、ポジティブな感情だけではなく、暗くて見つめることが恥ずかしい感情もあった。そして、自分という人間の底を外に出すことは、すべてを他人にさらけ出すことに等しく、非常に難しいことであった。

私は、監督や先生と話し合い、ゼミ生と話し合い、少しずつ少しずつ自分を知って、吐き出していった。周りのみんなは、言葉を探す私を静かに待って、丁寧に聞いてくれた。一人で言葉に詰まると、助け船を出してくれることもあり、支えられつつ自分を見つめてきた。人と話すことで、自分でも知らなかった感情、根底にある思いを考えることができた。自分では無意識的に守っている、考えないようにしている部分に気づかされたり、「目からうろこ」の考え方を教えてもらったり、たくさんの発見があった。

そうして自分を振り返って臨む演技は、それでもやはり難しく、最初は泣きそうになった。法子の気持ちを考えたからといって、それが体で表現できるわけではないのだ。普段あまり叫ばない私は、感情の波を表現できず、何度も何度もやり直しをした。その度に悔しく、できないことが恥ずかしく、絶対やってやる！という気持ちになった。

撮影が進むにつれ、だんだんと「演じる」ことに慣れていった。気がつくと法子と自分の感情がシンクロしていた。ズレはもちろんあって、違う人物なのだが、自然と「法子」になっていくのである。不思議な感覚であった。演じ方でも、法子の感情でも、疑問に思ったことはすぐに質問して、みんなと考えた。自然と自分の考える法子を外に伝えて、深めていった。そうして、進んで

いった。

演じることは、その人物の物語を紡ぐことである。法子には法子の物語がしっかりと刻み込まれており、それを演じることは、法子を物語るということだ。そして私は、演じることにより、自分の物語も紡がれていくことに気が付いた。物語に閉じ込められたその人の物語を、現実の自分が物語る。そこで生まれる感情、経験、様々な事柄。それこそが私の物語なのである。

演じることと物語は深いつながりを持っている。物語を演じることで物語が生まれ、物語はどんどん広がっていくのである。そこには、決して自分だけの物語ではなく、多くの物語が重なり合って、つながりあって、あふれているのである。

私は、法子になって、法子の物語を紡いでいた。そして、私の物語も生まれていた。物語を物語ることで、それを受け取る誰かに、かかわった誰かに、物語が受け継がれ、物語を物語った瞬間から、また新たな物語が生まれていくのだろう。

能面法子

物語と物語のつながりの中に、物語のひとつとして、自分がいること。誰かと、何かと、つながっていて、それはこれからも広がっていくこと。映画製作は、自分の気持ちや表現すること、仲間と一つのものを作り上げること、その他様々な経験を通じて、そのことを実感させた。人とかかわり、かかわることで人を好きになり、これからもつながっていくことを感じることができたのだ。わたしはそれが、とてもうれしい。

（しっかわ　ゆきこ　本学学部三年生）